

1月31日、豆まき集会がありました。本校からもいろいろな心の鬼が追い出されました。豆まきで思い出す、私の好きな話があります。読んでみてください。

鬼は内 福は外

とんと、むかし。

ある山奥の村に貧しい百姓夫婦があった。なんぼ働いても暮らしは楽にならず、節分になってもまく豆さえない。すると、かかさんが大事にしてきた嫁入りの時の腰巻きを売って、節分の豆を買ってきた。

その晩、ととさんは「かかよ、世間では鬼は外、福は内というのでわしらもそうしてきたが、暮らしは少しも楽になんね。今年は言い方を変えてみるべ」と言うた。それで、その晩は「鬼は内、福は外」と大声をあげて、豆をまいたと。

豆を巻き終わると、いつの間にか赤鬼、青鬼が大きな鉄棒をカツン、カツンと突いて入って来た。夫婦はたまげて、こわごわ見ていると、

「どこの家さも鬼は外というのに、おまえどこでは鬼は内、福は外というておらどもを呼んでくれた。うれしくてならん」

と言うた。しかし、せっかく来てくれたが鬼どもに食わせるものがない。すると、鬼どもはおれどもにも年をとらせてくれと、赤と青のふんどしを、かかさんに渡した。かかさんがそのふんどしを持って町の質屋に行くと、番頭さんはびっくりして、

「千両よりは、貸せられませね」

と、言うた。たまげたのはかかさんで、生まれてはじめての千両の銭を背負うと、帰りに、酒や米、さかなやしょうゆなどを買ってきた。酒を沢山飲んだ鬼どもは、身ぶり手ぶりもおかしく踊り始めた。その騒ぎを、隣の爺さまが聞きつけて、こっそりのぞいて見た。あんまり楽しそうなので家の中まで入ってくると、酔っぱらったととさんが、

「そこへ来たのは何者だ。酔っ払いか」

と言うたので、隣の爺さま、

「酔っばらいじゃねえ、正気だ、隣のわしだ」

と言うた。すると、それを聞きつけた鬼どもはたまげるやら、慌てるやら、

「なに、鍾馗が来たと」

ととと裏口から逃げてった。あんまり慌てたもんで、大事な鉄棒を置いたままだった。

「あれ、鬼ども、大事な鉄棒を忘れていった。今度くるまで取って置いてやるべ」

夫婦はその鉄棒を大切にしまっておいた。次の年の節分の夜には酒を用意して待っておったが、どうしたことか鬼どもは来なかった。

そこで、鉄棒を質屋に持って行くと三千世界にまたとない宝物だったので、質屋はありったけの千両箱を積み上げた。

「鬼は内、福は外」と言うたおかげで、夫婦はたちまち大金持ちになって、一生安楽に暮らしたのだと。



小学館 本の窓 1987年2月号
民話歳時記② 辺見じゅん より

こんな昔話にも、本を読む楽しさがあります。

鬼と鍾馗様のことについては、次号で触れたいと思います。

